



元小学校教員、現生成AIコンサルタント。 1人では決して見つけれなかった道筋を 「教育テック大学院大学」が照らしてくれ た

MBA TECH 教育テック公式note
2025年8月7日 00:30

【教育イノベーター Voice 1期生リレー連載 No.1】

13年間の小学校教員生活を経て、生成AIコンサルタントとして独立した2025年入学1期生・古賀 伸之 さん。

教育とテクノロジーを融合させた理想の学びを形にすべく、本学での研究に挑んでいます。テーマは「初等教育における生成AI活用が教員の在り方と働き方に与える影響」。

実務と研究を行き来しながら、仲間や先生方との出会いから得た気づき、そして新たに広がった人生の可能性を描きます。

▼ 目次

なぜ、今この大学院で学ぶのか

大学院での学びと、生活スタイルのリアル

ゼミという“出会いの場”の価値

今進めている研究と、広がった人生の可能性

PROFILE

教育テック大学院大学について

皆さん、はじめまして。

教育テック大学院大学の古賀伸之と申します。

この記事が、本学に興味を持つ社会人や教育関係者の皆さんにとって、大学院での学びをリアルに感じ、「自分もここで学べそう」と思っていただけなきっかけになれば嬉しいです。

なぜ、今この大学院で学ぶのか

私のキャリアの原点は、13年間の小学校教員生活です。子どもたちに寄り添い、信頼を寄せてもらえることにやりがいを感じる一方で、公教育の仕組みに強い限界を感じていました。

そんな葛藤の最中、保護者とのトラブルをきっかけに心身のバランスを崩し、うつ病と診断されました。そして、その過程で、自分がASD（自閉スペクトラム症）の当事者であることも分かったのです。半年の休職を経て教職を離れる決断をし、自分の特性を活かしながら、自分の本当にやりたい教育実現のための道を模索し始めました。

その答えのヒントとなったのが「生成AI」との出会いです。

「これは世の中を変えるすごい技術だ」と直感し、「自分なら、この技術をもっとうまく教育に活かせるはずだ」という確信にも似た思いが湧き上がりました。大手生成AIスクールと業務委託契約を結び、生成AIコンサルタントとして独立。今では複数の企業と契約しながら、教員向けの生成AI研修も主催しています。

ASDという特性を受け入れ、生成AIという強力な武器も手に入れました。しかし、理想の教育機関を設立するという大きな目標を前に、「具体的に、どうやって形にすればいいんだ？」という壁にぶつかり、前に進めずにいたのです。

そんな私を救ってくれたのが、教育テック大学院大学でした。教育とテクノロジーを融合させ、経営視点まで学べる。まさに、私の理想を実現するための具体的な方法論がここにあると確信しました。ここなら、私のビジョンを現実にするための、最後のピースが埋められる。そう強く感じ、入学を決意しました。

大学院での学びと、生活スタイルのリアル

入学してまず感じたのは、「自分は井の中の蛙だった」ということです。

教育現場で無手勝流にやってきた実践が、一流の先生方の下で理論や背景と共に体系化されていく。最先端の教育機関や企業の事例から、教育しか知らなかった自分がマーケティングやブランディング、そして研究手法を学ぶ。そのすべてが衝撃的で、刺激に満ちています。

授業はA週とB週の2週間サイクルで構成され、A週は月・水・金・土の4コマ、B週は火・木・土の3コマ。各授業は3時間ですが、多くの授業がオンデマンド対応なので、私はリアルタイムで参加するゼミ以外は、ビデオで自分のタイミングで受講しています。週末にまとめて視聴したり、倍速で効率的に

学んだり、家庭や仕事と両立しやすい仕組みがとてもありがたいです。

課題も過度に重くはなく、長くても2時間ほど。移動時間を活用したり、生成AIを壁打ちや論文検索に使って、効率よく取り組んでいます。ただし、AIに任せきりにはせず、「自分の頭で考える」ことは手放さないようにしています。

ゼミという“出会いの場”の価値

そして何より、ゼミの時間は私にとって特別な場所です。

先生方はみなさん本当にプロフェッショナルで、圧倒的な経験と知識を持っておられますが、決して偉ぶらず、むしろ誠実で謙虚。「実るほど頭を垂れる稲穂」のような方ばかりで、心から尊敬しています。

ゼミ生もまたすごい。中学校の校長先生、自分で事業を立ち上げている人、教育関連企業やIT企業でバリバリ活躍されている方々...そんなメンバーと同じ空間で、同じテーマについて語り合えること自体が刺激であり、学びです。それぞれ背景は違っても、「教育をもっとよくしたい」という思いでつながっている。しかも、教育技術にとどまらず、経営や社会の構造までを視野に入れている方ばかり。

それなのに、雰囲気はとてもあたたかくて、ギスギス感は何もない。ほんわかした空気感の中で、安心して自分を出せる環境があります。この仲間たちと出会えただけでも、入学して本当によかったと思うほどです。

今進めている研究と、広がった人生の可能性

現在は「初等教育における生成AI活用が教員の在り方と働き方に与える影響」をテーマに研究を進めています。これは、私自身のコンサルタントとしての仕事と直結しており、実務で得た知見を研究に活かし、研究で得た視点を実務に還元するという、理想的な循環が生まれています。

実は入学前、私は「もう教育の現場には戻れないかもしれない」と感じていました。ASDを抱えて教育現場を離れた自分が、これからどう生きていくのか、はっきりした答えがなかった。でも、教育テック大学院大学と出会ったことで、「いろんな立場があっても教育に関わることができる」「自分の特性を生かして、別の形で教育に貢献できる」——そう確信できたんです。

あのまま入学していなかったら、おそらく私は一般企業に就職するか、公教育に戻るかという二択しか思い浮かばなかったでしょう。

でも今、私はフリーランスとして活動し、フリースクール設立に向けて動いています。そんな働き方ができるようになったのは、間違いなく、ここで出会った仲間や先生方、そして「教育を軸に人生を再構築できる」という気づきを与えてくれたこの学びの場のおかげです。



未来をつくる仲間へ

私の根底には、「ジブンドリブン・コラボレーティブン（自分の意志で人生を選び、他者と共に生きる）」という価値観と、「すべての子どもが“自分のまま”で立てるように」というビジョンがあります。それを実現するための教育機関を設立することが今の目標です。

リスキリングとリカレント教育が叫ばれ、まさに生涯学び続ける時代です。生成AIの台頭により、私たち人間の役割は大きな転換点を迎えています。そんな不確実性の高い時代だからこそ、ここでの学びは大きな力になると確信しています。

この大学院には、教育の王道を知る「正統派の学び」と、社会の最前線で活躍する「実務家の知」が集まっています。本気で世の中を変えようとしている人たちが、ここに集まっているのです。

もし、この記事を読んで少しでも心が動いたなら、ぜひ一步踏み出してみてください。一緒にここから、世界を変えていきましょう。

PROFILE

小学校教師として、東京都で8年間、名古屋市で5年間、正規教員として勤務。校務主任および学年主任を歴任。

現在は、生成AIコンサルタントとして、大手生成AIスクールほか複数社にて活動。2,500社・1万人以上の法人顧客にコンテンツを提供。

所属ゼミ

妹尾昌俊 教授 ゼミ



未来を変えるチェンジメーカーを育てる。 星の杜中学校・高等学校の挑戦と本学での 学び

MBA TECH 教育テック公式note
2025年8月7日 00:32

【教育イノベーター Voice 1期生リレー連載 No.2】

日本の学校教育が大きな転換期を迎える中、「チェンジメーカーの育成」を掲げる私立中高一貫校で校長を務める2025年入学1期生・小野田一樹さん。校則や定期テストを廃止し、非認知スキルを育む21世紀型教育を推進する改革で全国から注目を集める一方、未来の社会を見据えた学校経営の在り方を学ぶため、本学への進学を決意しました。本記事では、「中等教育における社会的知性（SQ）育成のためのカリキュラム開発」をテーマに研究に挑む日々と、そこで得られる学びや広がる交流の可能性を紹介します。

▼ 目次

なぜ、今この大学院で学ぶのか

学び始めて感じていること

今取り組んでいる研究・活動やその面白さ

入学後の生活スタイルについて

今後の展望や、読者に伝えたいこと

なぜ、今この大学院で学ぶのか

現在、学校教育のコンサル会社を経営する一方で、私立中学校・高等学校の校長として勤務しています。本校は、「新たな価値を創造し社会に貢献するチェンジメーカーの育成」をスクールミッションに掲げ、校則や定期テストがない、制服の着用も自由、これからの社会で活躍できる非認知スキルを育成する21世紀型教育を実践している学校です。元は女子校でしたが2年前に共学化し、おかげさまで、3年目の今年度の新生は、改革前の400%増となり、日本全国の学校が視察に訪れる学校になっています。

今、大きな転換期を迎えている日本の学校教育の改革を、本校が先頭に立ちリードしていこうと、日々、新しい教育を模索し実践していく中で、私自身、これから起こり得る社会の変化とそれに対応できる人材を輩出するための学校教育の在り方について、俯瞰して学ぶ機会が欲しいと考えるようになっていました。教育学を学べるいくつかの大学院に資料請求し、進学を考え始めていたときに、教育テック大学院大学のネット広告が目に入りました。オールオンラインで受講できる点や、社会人を対象としている大学院大学ため、夜間や土日に受講できる点もあり興味を持ちました。ただ、この大学院で学ぼうと決めた最大の理由は、教育学×経営学×情報学、という新しい学際的な学びです。まさに！これからの学校経営をしていく上で必要になるであろう経営学や情報学との掛け合わせで教育学が学べるという革新性に惹かれ、この大学院で学ぶことを決めました。

学び始めて感じていること

1年次の今年度は、週に3日、1日3時間(90分×2コマ)というペースで受講しています。本学の各先生方の講義はもちろん、たくさんのゲスト講師の講義なども非常に刺激的です。

また、学生の皆さんも、全員社会人で、何かしら教育に関わっている、また興味を持っている方々です。そういう方々と知り合えたことも大きな収穫でした。すでに、何名かの方々がうちの学校に見学に来て頂いていますし、いくつかのプロジェクトが走り出そうとしています。

今取り組んでいる研究・活動やその面白さ

私の研究テーマは「中等教育で社会的知性(SQ)をどう育成するか？」です。在学中にカリキュラムを開発することが目的です。私のこれまでの人生で、論文を読むということをしたことがありませんでした。今、いくつかの関連する論文を読み始めていますが、専門用語がわからなかったり苦労していますが、これも、大学院生にならなければ経験しなかった新たな貴重な経験になっています。

入学後の生活スタイルについて

学校の勤務時間が17:40までなので、授業のある日は、退勤時間と同時に帰ります。帰宅するのに40分前後かかるので、いつも18:30からの講義は、ギリギリ間に合うか間に合わないか、という感じです。職場を出るのが遅れたり講義に遅れる場合は、スマホで受講も可能ですので、その辺り、社会人が学ぶ環境としては、非常に便利だと思います。必修以外にも、教育マーケティング・広報ブランディングやソーシャルアントレプレナーシップ論など個人的に興味がある分野の講義も受講していて、毎回興味深く受講しています。

今後の展望や、読者に伝えたいこと

今、日本の学校教育は大きな転換期を迎えています。ここから5年・10年のAIの進化などが牽引していく社会の価値観の大転換期に、日本の学校教育が偏差値偏重の従来の価値観から脱却し、未曾有の人口減少、経済の低迷により、世界から存在感が薄れていく日本の建て直しの責任を本気で負う覚悟があるのかが問われています。そのような混沌とした変革の時代を、学校の中にいる「教員」だけでは乗り切れないことは明らかです。テクノロジーをフル活用し、企業や地域を巻き込んで推進していくことが求められます。

そして、本学はその旗手になれる可能性があります。今後ここで学んだ卒業生や在校生たちがチカラを合わせ、150年間変わっていない教育岩盤に穴を空ける、そんな教育界にインパクトを与える高等教育機関が本学だと思っています。

PROFILE

大学卒業後、民間企業2社で教育事業を担当し、全国の中学校・高校 約200校を訪問、世界40の国・地域の様々な教育機関を視察し日本の教育の課題を実感する。2020年に株式会社EDUCATION designを創業し代表取締役役に就任。同年、神奈川県川崎市に認定保育園を開園。2021年より学校法人宇都宮海星学園にて校長補佐・開校準備室長に着任し、学校改革全般を担当する。2024年4月より校長に就任。

研究テーマ

中等教育における社会的知性(SQ)育成のためのカリキュラム開発

所属ゼミ

妹尾 昌俊 教授 ゼミ



「選ぶ・決める」文化を子どもへ——大学院での挑戦と、学校組織への問い直し

MBA TECH 教育テック公式note
2025年8月7日 18:00

【教育イノベーター Voice 1期生リレー連載 No.3】

「子どもが自ら学ぶ学校」を実現するためには、
一教師のあり方や学校組織そのものを変える必要がある—、
そう考え、2025年入学1期生・**館 雅之 さん**は大学院での探究を始めました。
長年、公立小学校の学校経営に携わってきた経験をもとに、「子どもの学びのオーナーシップを支える学校経営モデル」を研究。教師が意思決定に参加でき、役割を選べる組織への転換を目指し、多様な仲間との対話や理論を糧に、現場と研究を往復しながら変革への道を切り拓いています。

▼ 目次

変革への違和感と出会い

なぜ、今この大学院で学ぶのか

多様な学びの仲間との出会い

研究テーマと着目点

学びを支える柔軟な環境

校長としての挑戦

変革への違和感と出会い

私は長年、公立小学校で学校運営に携わってきましたが、「このままで良いのか」という違和感と葛藤を抱えながら日々を過ごしてきました。教員不足や若手教員の急増により、現場は日々の課題対応に追われ、ともすれば子どもたちの主体性を育む環境づくりが後回しになってしまう。そんな現実に対して、どこかで本質的な変化を起こさねばならないという強い思いが募っていました。そうした折に出会ったのが「イエナプラン教育」や「学びのオーナーシップ」という考え方です。

なぜ、今この大学院で学ぶのか

「子どもが自ら問いを立て、学び方を選び、仲間と共に深め合う」。そのような学びは、従来の「教師がすべてを決める」学校文化の延長では実現が困難です。こうした教育観に触れたことで、私は大学院大学への入学を決意しました。「子どもが自ら学ぶ学校」を本気で実現するために、まずは教師や学校組織そのものを問い直さなければならぬと考えたからです。

多様な学びの仲間との出会い

入学後、最も驚いたのは、教育業界以外のバックグラウンドを持つ方々と出会える環境の豊かさでした。企業出身の方や行政分野で活躍していた方々との対話は、これまでの「学校では当たり前」とされてきたことを相対化する視点をもたらしてくれました。チーム運営の方法、人材育成の考え方、意思決定のプロセス—そうした対話から得られるヒントは、学校現場の改善にも直結しています。何より、自分自身の考え方や行動様式が少しずつ変容していく実感があり、「自分を変えられる」という手応えは大きな喜びです。

研究テーマと着目点

現在取り組んでいる研究テーマはまだ模索段階ですが、「子どもの学びのオーナーシップを支える学校経営モデルの構築」です。特に「教師の意思決定参加」と「ジョブ型職員組織の導入」に着目し、校内業務の可視化や分掌組織の再編、プロジェクト制の導入を考えています。こうした取組を通じて、子どもに限らず、教師自身にも「選び、決める文化」が根づくことで、学びの環境はさらに豊かになるのではないかと感じています。

学びを支える柔軟な環境

さらに、生活スタイルにも大きな変化がありました。校務を担いながらの学びは決して容易ではありませんが、すべての講義が即日でアーカイブ視聴可能であることが非常に助けになっています。当日の受講が難しい日でも、自分のペースで視聴し、必要に応じて繰り返し学ぶことができるのは、「個別最適な学び」にほかならず、時間のやりくりが難しい業務の中でも高いモチベーションを維持する原動力になっています。課題に取り組む際も、自分の関心に沿って実践と理論を往復しながら、資料収集や現場視察などを計画的に進めています。

校長としての挑戦

私は今、校長として「子どもに選ぶ自由を保障する学校」を目指しながら、その前提となる「教師が選べる組織」づくりに挑戦しています。教育改革は一朝一夕で成し遂げられるものではありませんが、「学校が子どもにとっても大人にとっても、共に育ち合う場であるべきだ」という信念のもと、研究と実践を行き来しながら歩みを進めています。



探究の旅の始まり

この大学院での学びを通じて得られたのは、単なる理論ではなく、実践に根ざした希望です。現場に立ち続けながら、未来の学校像を描いていく——そんな探究の旅はまだ始まったばかりですが、日々の変化がその道のりを確かに照らしてくれています。

PROFILE

小学校校長。これまで3校で校長を務め、「子どもに学びのオーナーシップを」を合言葉に、子どもたちが自ら学びを創り出せる学校づくりを推進。地域との協働を重視し、令和6年度には文部科学大臣表彰を受賞。

これまで小・中学校教員、教育委員会指導主事、副校長として幅広い教育現場を経験。専門は音楽教育で、合唱団の指揮や学習指導要領の作成にも携わる。バロック音楽や民俗音楽を愛し、オーボエやリコーダーの音色を心の糧としている。

所属ゼミ

妹尾 昌俊 教授 ゼミ



教育サービス（教室・塾）企業のDX実現に向けて

MBA TECH 教育テック公式note
2025年8月8日 23:01

【教育イノベーター Voice 1期生リレー連載 No.4】

GIGAスクール構想や生成AIの普及が加速する中、民間教育サービスも変革を迫られています。2025年入学1期生・丸谷昂明さんは、従来型の教室・塾が抱える課題を前に、「公教育と民間教育の垣根を越えた新しい学びの形」を模索するため本学に進学しました。経営学や情報学、教育学を横断する学びと、多様な仲間との対話から生まれる発想をもとに、DXによる民間教育の変革と、すべての子どもたちに質の高い教育を届ける仕組みづくりに取り組んでいます。

▼ 目次

なぜ、今この大学院で学ぶのか

現在取り組んでいる研究：公民連携による新しい教育の形

社会人大学院生としての生活

今後の展望と皆様へのメッセージ

PROFILE

なぜ、今この大学院で学ぶのか

現在、GIGAスクール構想や生成AIの急速な普及といった教育環境の激変は、私の属するような民間教育事業者にも変革を迫っています。一方、長年に渡り対面指導と紙の教材に頼ってきた従来型の教室・塾といったサービスは、組織構造や文化などの要因により、柔軟な変革が得意とはいえません。この状況に関する強い課題意識から、これからの民間教育がどうあるべきかを探求したいと考え、本学への入学を決意しました。

私は新設の理系高校に一期生で入学、大学では文学部で芸術学や心理学を学び、就職後は教育サービス事業でのIT導入に携わるなど、異なる領域への越境を繰り返してきました。こうした経験から、多様な領域の知見を繋ぎ合わせることで、新しい価値、すなわちイノベーションが生まれやすくなると考えています。教育テック大学院大学では、教育学・経営学・情報学にまたがる広いカリキュラムが提供されており、そこに集う多様な人々との出会いがあります。多くの点を結びつけ、イノベーションのきっかけを創るには絶好の環境です。

現在取り組んでいる研究：公民連携による新しい教育の形

私が所属するゼミの柴山慎一先生は、経営学（組織論や広報マーケティング・ブランディング）による企業の変革を実践されてきた方です。先生のご指導のもと、私は今、「従来型民間教育サービス(教室・塾)におけるDX実現」というテーマで研究を進めています。具体的には、これまで分離されてきた公教育と民間教育の垣根を越え、両者が連携する新しい教育の仕組みを構想するものです。例えば、子どもの学校での学習データを民間事業者と共有し、一人ひとりの個別最適な学びを学校外でもサポートする、といったような仕組みのことです。激務により余白がないと言われる教員の業務を再分配することで、教員の役割を知識伝達から「学びの設計・伴走」へと転換することにも繋がると考えています。もちろん、個人情報保護といったガバナンス面の課題にも真摯に向き合う必要がありますし、実際には限られた研究期間でどこに焦点を合わせて深掘りするか、もう少し検討が必要です。

ゼミ以外の講義においても、本学での学びからは知的好奇心を刺激されます。特に、ソーシャル・アントレプレナーシップ論や、各講義における教育、政治、ITなどの第一線で活躍されるゲスト講師のお話は、社会課題解決への思いを一層強くしました。すべての子どもたちに質の高い教育を届けるというSDGsの目標達成にも貢献したいと考えています。多様なバックグラウンドを持つ教授陣や学友との対話は、自分の視野を大きく広げてくれます。仕事においても役立つ引き出しや人脈が増えました。

社会人大学院生としての生活

平日の就業後、そして週末が主な学習時間です。授業はオンラインなので、移動での時間のロスがなく、大きな利点です。リアルタイムで参加できない場合も、オンデマンド配信で後追い視聴できるため、業務や家庭の予定と重複があってもリカバリできます。ただし、多くの授業ではグループワーク

が盛り込まれているため、極力リアルタイムで出席するようにしています（純粋にその方が得られる学びが多く、面白いため）。

各授業の後にはレポート等の課題が課されることが多いです（授業が2週間サイクルのため、期限は比較的長め）。私は受講しながらクラウド上にノートをまとめておき、授業のない日の夜や週末にまとめて課題に取り組んでいます。

現在私は、家庭では2児の父、仕事では30人超を擁する室の長です。家庭や仕事との両立は大変ですが、同僚や家族の理解と支えによってなんとかこなせています。日曜の日中だけは極力、仕事も学業も忘れて家族最優先で時間を使うようにしています。

今後の展望と皆様へのメッセージ

本学での学びは、私自身の人生を通じたキャリアにとって大きな糧となるだけでなく、日本の教育の未来を切り拓く一助となると信じています。この記事を読んでもらった皆様にも、社会人として学び続けることの意義や、本学の魅力の一端を感じていただけたなら幸いです。変化の激しい時代だからこそ、共に学び、未来を創造していきましょう。

PROFILE

氏名: 丸谷 昂明 (まるや たかあき)

略歴:

2004年 東京都立科学技術高校 科学技術科 卒業

2008年 早稲田大学 第二文学部 表現・芸術系専修 卒業

2009年 (株)学習研究社 入社

※現在は分社化により(株)学研エデュケーショナルに所属

2024年10月より管理部 システム管理室長

教室事業におけるIT導入、顧客管理、ユーザーサポート等を担当

研究テーマ:

従来型民間教育サービス(教室・塾)におけるDX実現

所属ゼミ

柴山慎一 教授 ゼミ





学校・地域が連携した持続可能な実践モデル ～長野県南箕輪村での挑戦

MBA TECH 教育テック公式note
2025年9月3日 10:00

【教育イノベーター Voice 1期生リレー連載 No.5】

長野県南箕輪村で、子どもから大人までを対象にキャリア教育を実践するキャリアコンサルタントとして活躍する、**2025年入学1期生 富岡 順子さん。**

「大学院で学びたい」という想いを抱き続けながら、子育てや仕事と両立できるタイミングを模索していた中、教育テック大学院大学との出会いがすべてのピースをつなげました。

本学では、オンラインだからこそ可能な柔軟な学習スタイルと、AIや教育DXの活用による新しい学びのあり方に日々刺激を受けながら、実務と理論の往復を重ねています。

現在は「生涯学び続けるキャリア自律人材」を育てる地域モデルの開発をテーマに研究を進め、学びの成果を地域に還元する挑戦を続けています。

本記事では、学ぶことの喜びがどのように人生の可能性を広げていくのか、その歩みを辿ります。

▼ 目次

学びへの情熱が拓く、私の新たなキャリアパス

なぜ、今この大学院で学ぶのか

全てのピースがカチッとハマった瞬間

学びが人生を豊かにする

AIとの共存で広がる学びの可能性

生涯学び続けるキャリア自律人材を育むために

PROFILE

学びへの情熱が拓く、私の新たなキャリアパス

「死ぬまでにやりたいことは？」、こんな質問を投げかけられました。仲間たちは「海外に行きたい」「〇〇へ行って絶景を見たい」と夢に目を輝かせていました。そんな中、私は「大学院に行って勉強したい」と回答しました。ただ一人、異なる選択肢を挙げた自分は、少しおかしいのかなと思ったのを覚えています。

高校で部活動に全力投球した私は勉強に躓きました。部活動に力を入れ、その結果、大学入試に失敗。これが、私にとって最初のアイデンティティ・クライシスでした。

入学した大学では心理学と教育学を学びました。大学での学びは自分の人生や抱えている課題と結びつけることができ、とても面白かったのです。「学ぶことってこんなに楽しいことなのか」と初めて知りました。高校時代の挫折体験がそれを可能にしたと思います。

私は現在、長野県の南箕輪村という小さな村でキャリアコンサルタントとして、子どもから大人までのキャリア教育に携わっています。「学ぶことの楽しさ」を伝え、誰もが豊かなキャリアを築けるお手伝いができたらと、日々奔走しています。コミュニケーションを通じて学びが深まる瞬間に最高の幸せを感じます。また、好きなことに向き合えば向き合うほど、新たな問いが生まれてくるものです。



なぜ、今この大学院で学ぶのか

全てのピースがカチッとハマった瞬間

「大学院で教育を専門的に学びたい」との思いは年々強くなっていました。しかし、大学院への入学は子育てが一段落する10年後かな...と半ば諦めていました。ところが、チャンスは予想よりも早く訪れました。完全オンラインで教育のMBAを目指す大学院が開学したのです。

この出会いは、まさに「学びたい領域、環境、タイミング」、全てのピースがカチッと音を立ててハマる瞬間でした。“実践的な教育学の専門性”を追求できるカリキュラム、地方在住でも子育てと両立できる“完全オンラインの学習環境”、特に、現職のキャリアコンサルタントとして、理論と実践を結びつけて学びを深められる点が、この大学院を選ぶ決め手となりました。開学を知ったわずか4日後には書類を揃えて出願して入学。この決断の速さはスポーツで培った私の強みです。

社会人大学院生としての生活

学びが人生を豊かにする

大学院での学びは予想以上に面白いものです。180分があっという間に過ぎていきます。社会人経験を挟んだ大学院生という立場は、先生や仲間の言葉を実際の仕事の様々な場面に応用して想像することができ、一見関係ないように思える情報でさえも、自分の興味関心に繋がり、新たなアイデアへと変換されていくのです。授業で出会うあらゆる物事が面白く感じられ、人生がより豊かになっているのを日々感じています。

「入学後の生活スタイル」も大きく変わりました。朝5時、子どもたちが起きる前の時間や、子どもたちが寝た後時間を確保して集中的に課題に取り組みます。夏休みは家族と一緒に勉強するなど、学びが日常に溶け込んでいます。嬉しそうに勉強する母の姿を見て、子どもたちにも「勉強って楽しそうだな」という気持ちが伝染したら、こんなに幸せなことはありません。

「学習環境」も非常に充実しています。自宅にしながら講義を受けられるのは大きな魅力です。さまざまな事情でリアルタイム出席できない時は、オンデマンドで受講できるので、自分のペースで学びを深められます。

AIとの共存で広がる学びの可能性

この大学院を選んでよかったと特に感じていることのひとつが、“生成AIとの学びを実体験として学んでいる点”です。これからの学びではAIとの共存は不可欠だと感じている私自身が学び手となり、試行錯誤しながら、AIと共存しながら、学びを深めています。

難しい専門用語の説明、ディスカッション相手、アイデアの壁打ち相手や情報整理の補助など、「学びを加速させるためのツール」としてAIを活用しています。

生涯学び続けるキャリア自律人材を育むために

現在、「どのような学びの経験を蓄積すれば、生涯学び続けるキャリア自律人材が育つのか」を研究しています。研究の成果を活動拠点である南箕輪村で活かし、子どもから大人まで地域の人々が主体的に学び、学びを共有し、新たなスキルを習得できるコミュニティベースの学習プログラムを開発し、生涯にわたるキャリア形成を支援することを目指しています。



「自分が知らない知の世界を自分の目で見たい、仲間たちと新たな発見を楽しみたい」という思いは、「まだ行ったことがない世界を自分の目で見たい」という他の人の夢と同じだということに気づきました。

探究したいテーマに出会えたことは、私の人生で最高級の幸運です。学びは新たな視点を与え、人生を豊かにする力を持っています。新たな学びへの一步を踏み出そうか迷っているなら、ぜひその心の声に耳を傾けてみてください。諦める必要はありません。オンライン学習の選択肢も増え、多様な学びの形が存在します。あなたの「死ぬまでにやりたいこと」の中に「学び」があるのならば、それはきっと、人生をより深く、より面白くしてくれるはずです。

PROFILE

- コレカラボ-corecareerlab-代表 南箕輪村キャリア教育事業担当
- キャリアコンサルタント/産業カウンセラー/アスリートキャリアコーディネーター
- 認定ワークショップデザイナー/ワーク・ライフバランス認定コンサルタント

大学卒業後地方銀行に入行、結婚を機に退職。その後専業主婦になったことでアイデンティティクライシスを経験するが、9歳から続けていたソフトテニスで不調を乗り越える。

2014年に夫の仕事の都合で長野県南箕輪村へ移住。結婚や出産というライフイベントによってキャリアが中断されることを経験し、一人ひとりがどんなことがあっても人生を乗り越えていける生きる力を育みたいと、「キャリア×教育×ワークショップ」を実践中。

研究テーマ:

学校・地域が連携した持続可能な実践モデルの構築 一生涯学び続けるキャリア自律人材の育成に向けてー（仮）

所属ゼミ

藤本 典裕 教授 ゼミ



宇宙は、誰もが活用できる“日常”になる

MBA TECH 教育テック公式note
2025年9月3日 18:00

【教育イノベーター Voice 1期生リレー連載 No.6】

民間宇宙飛行士として世界を飛び回り、200以上の民間宇宙サービスを開発・提供するASTRAX代表で、**ASTRAX民間宇宙飛行士 山崎 大地（TAICHI）さん**。

理系エリートの育成に偏った日本宇宙教育に一石を投じ、「あらゆる人が宇宙を活用できる時代」にふさわしいユニバーサル人材の育成モデルを目指し、**2025年入学1期生**として本学での学びをスタートしました。

生成AIや最新の教育テクノロジーを駆使し、時間・場所・国籍・言語の壁を超えて、誰もが宇宙を自由に学び活かせる“進化型民間宇宙教育システム”の実現に挑んでいます。

▼ 目次

なぜ、今この大学院で学ぶのか

学びの中での驚きと気づき

入学後の生活スタイルの変化と学習スタイル

研究の進め方とテーマ

今後の展望と読者へのメッセージ

PROFILE

なぜ、今この大学院で学ぶのか

教育テック大学院大学に入学したのは、日本の宇宙教育のあり方に対する強い課題意識と危機感からです。海外ではすでに地球近傍のエリアの宇宙開拓が民間主導型へと急速にシフトしており、宇宙はNASAや一部の専門家だけのものではなく、あらゆる分野の一般企業や一般の人々が自由に活用する新たな産業基盤になりつつあります。

しかし日本では、長年にわたり国家主導型の宇宙開発が続けられてきており、最近では宇宙産業を国家主導型から民間主導型に改革すると言われつつも、実際は国家予算のバラマキと国家権力や既得権益に依存した新たな宇宙利権構造が膨れ上がりつつあるのが日本の実情です。そしてそれがまるで素晴らしいかのように正当化され、そうした未来を目指す人材育成の教育が盛んに行われています。結局日本の宇宙教育は、いまだに国家主導の枠組みによって理系エリートを育成する、旧来的な教育モデルのままなのです。

また、日本の学校での宇宙教育は、いまだに天文教育やものづくり・研究開発など理系教育に特化しているため、世界的な民間主導型の宇宙開拓産業の拡大の潮流に大きく出遅れてしまっています。私は15年ほど前から、国内外合わせて20万人以上に対し、世界最先端の民間宇宙開拓についての講演や講義を行ってきましたが、そこまでしても日本の「完全に固定概念に縛られた偏った理系宇宙教育や、国家主導型の宇宙開発への依存、地上での生活から程遠い宇宙意識」を変えることは非常に困難でした。

このため、私の会社では2017年より、理系文系の枠に一切とらわれず、日本の国家宇宙政策にも依存しないユニバーサル人材教育を実践すべく、独自の民間宇宙教育カリキュラム、教育訓練システム、評価指標の構築に取り組んできました。しかし、日進月歩で進化する世界の民間宇宙開拓の勢いに対し、教材コンテンツの更新や指導が全く追いつかないという課題に直面していました。こうした背景から、日本の古い宇宙教育システムや宇宙意識を打破するには、最新の教育テクノロジーを駆使した全く新しい民間宇宙開拓教育訓練システムをゼロから構築し、「民間の力で宇宙を開拓し、宇宙で活躍できるユニバーサル人材」の育成を、迅速に、かつ世界規模で行っていく必要性を感じていました。

そんなとき、教育テック大学院大学の広告をネットで目にし、「これだ！」と閃きました。この大学院で学ぶ最新の教育テクノロジーや、実用化が進む生成AIやデジタル教材技術を駆使し、講師一人に依存せず、AIが常に最新の教育コンテンツを生成することで、世界中いつでもどこでも誰でも最新の民間宇宙開拓技術を学べる自動進化型民間宇宙開拓教育訓練システムを開発しようと決意しました。

これにより、時間や場所、国籍、言語、文化、立場を問わず、デザイン、アート、ファッション、エンターテインメント、旅行、飲食、福祉、文化、教育など、あらゆる人が多分野横断的に自由に学べる民間宇宙開拓教育が可能になると考えています。

学びの中での驚きと気づき

本学での学びを通じて最も驚いたのは、さまざまな分野で活躍されている専門家による講義が受けられること、そして受講生も教育関係者、社会福祉に関わる人、企業で働く人など、非常に多種多様な背景を持った方ばかりで、日本人だけでなく外国人の学生も多数在籍しており、それぞれがリアルな現場課題と向き合いながら実践的な研究に取り組んでいることです。

特に「ソーシャル・アントレプレナーシップ論」や「教育テック事例研究」、「教育テック総論」などの講義では、ビジネス・テクノロジー・社会課題が融合した視点から教育の新しいあり方を再定義する手法などを学ぶことができ、毎日刺激を受けています。また、他の授業では、ビジネスやテクノロジーだけでなく、日本や世界の教育の歴史や教育制度など、普段の生活ではまったく知り得なかった教育分野の専門的な知識に触れられることも、知識の幅や視野が広がる要因となり、日々成長を実感しています。

この大学院での学びは、私が抱えている問題や課題の解決にも、大いに役立つものと確信しています。

入学後の生活スタイルの変化と学習スタイル

私の生活スタイルは、教育テック大学院入学後に大きく変化しました。1年目の前期だけで10種類の授業を履修しており、平日の夜はほぼ毎日、土曜日は朝から夕方まで授業を受けています。

私はほぼフリーの状態で行事しているため、もともと時間の融通は利きましたが、仕事の都合で国内外への出張も多く、特に2025年はクルーズ船上での業務に数ヶ月単位で従事する予定があり、本当に授業に参加できるか不安がありました。

しかし、教育テック大学院大学の説明会や受験相談会で事務局の方と話をすることで、その心配は完全に払拭されました。講義にはオンラインで参加でき、参加できない日の講義も録画されたアーカイブ動画で完全にフォローできる体制が整っていたからです。

実際、クルーズ船に乗って国内外各地を回りながらも、船内のインターネットやスペースXが提供する衛星インターネットサービス「Starlink（スターリンク）」を活用し、大学院の授業に出席することができました。衛星通信により、世界中どこにいても高速で安定したインターネット環境が確保され、ライブ授業への参加が可能なのです（クルーズ船の場合、場所によっては通信制約を受けることもありますが、甲板の上にアンテナを移動させれば非常に快適です）。

また、急な仕事や予定が入ってリアルタイムで授業に出られない場合でも、録画されたアーカイブ動画を後から視聴でき、しかも興味のある内容は何度でも見返すことができるため、本当に深く学ぶことができます。さらに課題の提出もすべてオンラインで完結するため、時間や場所に縛られずに学習を継続できます。このような柔軟性に富んだ教育システムは、忙しい社会人大学院生にとって非常にありがたいものだと感じています。

私の場合、講義の録画映像や配布資料をすべて生成AIに取り込み、文字起こし・要約したうえで復習しています。課題の提出にあたっては、まず自分の言葉で原稿を書き、それをChatGPTなどのAIツールで構成確認・校正するというスタイルで、学びと生成AIの融合を実践しています。このやり方の最大の利点は、私自身の記憶力に限界があっても、AIがすべてを記録・保持しており、必要に応じて知識やアイデアを即座に引き出して活用できる点です。こういった最新AI技術を積極的に利用できるのも教育テック大学院のいいところだと思います。

将来的には（できれば在学中に）、実際に宇宙空間から大学院の授業に参加することが私の目標のひとつです。民間宇宙飛行士という立場を活かして、「宇宙空間からの授業参加」や「宇宙から教育を行う」という新しい学びの形も実現していきたいと考えています。



研究の進め方とテーマ

研究の進め方としては、非常に遅れている理系に偏った宇宙教育の固定概念を完全に壊し、広い視点や視野をもって最新の民間宇宙開拓情報を常に吸収し続け、宇宙で活躍できるユニバーサル人材をスピーディーに育成していくために、既存の教育制度や枠組みにとらわれない、全く新しい民間宇宙開拓教育の形を実践的に創っていきたいと思っています。

私の会社が保有する独自の民間宇宙事業創造教育コンテンツや民間宇宙事業創造研究開発教育訓練センターにある民間宇宙船教育訓練シミュレーターなどの設備もフルに活用し、さらに本学で得られる知識・技術・経験・ネットワーク・支援体制も最大限に活かしつつ、「プロジェクト型自己学習 × 民間宇宙教育 × 最新テクノロジー × ソーシャルイノベーション」の融合によるユニバーサル人材の育成とともに、人類全体の知能のアップグレードに貢献していきたいと考えています。

また、私は毎年海外で開催されている世界最大の宇宙イベント「国際宇宙会議（IAC）」に参加しており、多くの国際論文を発表しています。2025年はオーストラリアのシドニーで13本の論文を発表する予定です。今後執筆する国際論文の中でも、現在教育テック大学院で学んでいることを積極的に取り込んでいきたいと考えています。

今後の展望と読者へのメッセージ

日本では、いまだに「宇宙に行きたいなら理系に進み、優秀になって宇宙飛行士に選ばれ、訓練を受ける」という古い発想が根強く残っていますが、世界ではすでに、18歳の若者から90歳を超える高齢者まで、経営者、女子大学生、YouTuber、障がいを持つ方々など、宇宙飛行士にならなくても、お金持ちでなくても、普通の人誰でも宇宙に行ける時代が始まっています。

これまで地球の重力に縛られていた人類の生活圏や経済圏は、いまや地球を飛び出し、月や火星、そして太陽系全体へと広がろうとしています。さらに、宇宙船を利用して地球上のあらゆる場所へ30分程度で移動できる時代も、もうすぐそこまで来ています。国という隔たりがなくなり、すべての人が「地球人」として協力し合いながら宇宙を開拓していく・・・そのような民間宇宙時代の到来は、これまでの教育の在り方そのものを根底から変えるチャンスでもあります。

私が本学で挑んでいるのは「これからの民間宇宙時代を切り拓くユニバーサル人材を育成する民間宇宙開拓教育のモデルづくり」です。これまで「宇宙は遠い世界」と感じていた方々にこそ、これからの宇宙は特別な世界ではなく、地球上の日常の仕事・暮らし・生き方と直結するリアルなフィールドであることを伝えていきたい。そして、誰もが宇宙をスマホのアプリ感覚で普通に使いこなせるような時代を創っていきたいと願っています。そのためにも、教育テック大学院で学んでいることをフル活用し、人類全体を地球人から宇宙人へと一気に進化させていきたいと考えています。

私は第1期生ということで、前例にとらわれる必要がありません。だからこそ、まったく新しいことにどんどん挑戦し、来年から入学してくる後輩の皆さんが、もっと自由に、快適に、臨機応変に学びに向き合える教育環境づくりに貢献していけたらと思っています。



ASTRAX会社紹介.pdf



4.8 MB

ファイルダウンロードについて

ダウンロード

PROFILE

ASTRAX民間宇宙飛行士 TAICHI（山崎 大地）

大学卒業後NASA（米国航空宇宙局）のジョンソン宇宙センター（アメリカテキサス州ヒューストン）やJAXA（宇宙航空研究開発機構）の筑波宇宙センター（茨城県つくば市）で、国際宇宙ステーションの開発・建設・運用という国際プロジェクトに従事。

その後、2005年に独立。現在は民間宇宙飛行士・無重力飛行士としての仕事を行いながら、超分散型民間宇宙事業創造研究開発教育訓練事業体「ASTRAX」の代表として、国内外を飛び回りつつ、宇宙旅行事業や無重力飛行事業、月面開拓事業など、さまざまな民間宇宙開拓サービス（200事業以上展開中）を開発・提供している。

また、これらの新しい民間宇宙事業を創造し発展させていくための民間宇宙人材（ユニバーサル人材）を育成するために、民間宇宙事業創造教育訓練機関「ASTRAX ACADEMY」や「ASTRAX KIDS」なども主宰している。

所属ゼミ

大和田 茂 教授 ゼミ



「教育 × テクノロジー × 経営」——キャリアの交点で、学び直しを決意

MBA TECH 教育テック公式note
2025年9月4日 12:00

【教育イノベーター Voice 1期生リレー連載 No.7】

ITエンジニアとしてキャリアをスタートし、教育ベンチャーのCTO、そして現在は教育DXを推進する株式会社ビルディットのCEOとして活躍する、

2025年入学1期生、富田 陽介さん。

開学を知った瞬間「これは自分のための大学院だ」と直感し、本学への進学を決意しました。

生成AIやVR、Notebook LMなどを活用しながら、AI時代にふさわしい学習スタイルを実践し、技術と教育を融合させた“次世代の学び”の可能性を追究。現在は、テクノロジーを活用して“いかに学びの体験価値を拡張できるか”を軸に、実務と往復しながら新たな教育モデルの構築に取り組んでいます。

本記事では、情報技術と教育をつなぐフロントランナーとしての視点から、教育テック大学院大学での学びがどのように事業と理念に接続されているのかを紐解きます。

▼ 目次

なぜ、今この大学院で学ぶのか

学び始めて感じていること

今取り組んでいること、今後の展望

終わりに

なぜ、今この大学院で学ぶのか

本学への入学理由を一言でいうと、一目で「私のための大学院だ」と直感したからです。
理由の詳細をお話するにあたって、かんたんに私の社会人キャリアについて書きたいと思います。

私は20年以上、情報通信技術者として働いてきましたが、直近15年ほどは主に社会人教育の領域におけるIT活用やDXを推進するためのシステム開発者として、研修会社や習い事事業者、教育ベンチャーのシステム開発やプロジェクト支援をおこなってきました。

もともとは携帯電話やスマートフォンなどに向けたモバイルアプリケーション開発に関心があり、エンジニアとしてのキャリアをスタートしました。ですが、経験を重ねていくうちに後進エンジニアの育成に関わったり、また、プライベートでも子どもを授かったりしたことが、教育領域に関心をもったきっかけとなります。

その後、とある教育ベンチャーのCTO（最高技術責任者）を務めた経験から、以降、自分が培ってきた情報技術スキルを教育分野にbetしていくことを決め、2016年には教育DXを推進するシステム開発会社である株式会社ビルディットを創業しました。現在、私は、株式会社ビルディットの代表を務めています。

ビルディットでの第5期を迎えた2020年頃から、請負の開発サービスだけではなく、自社が掲げている社会ビジョンである「一人ひとりの成長が、世界をより良くする」を実現していくための自社サービスの開発に着手し、2021年4月には「内省・ふりかえりの習慣化を支援するAIコーチングアプリ Stockr」をリリースしました。現在私は、この内省アプリを通じて、多くの人が自身の生き方や自分だけの言葉に出会い、自信や充実感に満ちた人生・挑戦と成長の人生を歩んでいく支援をしています。



現業では教育サービスの開発に従事

このように、私のキャリアは、情報通信技術のエンジニアとしてスタートし、途中から教育領域に関わり、直近10年ほどは経営者としての活動を重ねてきていることとなります。つまり、本学が掲げている「教育 X 経営 X テクノロジー」の学際領域は、私のキャリアのど真ん中です。私はこれまで、

自分の選んだ道を信じながらも、どこかキャリアを模索していることを感じていましたが、本学での学びは、私の歩んできた道を体系的に落とし込む絶好の機会だと確信しました。

さらに、本学が開学1期生を募集するタイミングであったこと、大学院の説明会で教授陣や事務局の方々の熱いプレゼンテーションをお聴きできたことも入学の決意を後押ししました。経営者としての活動をしながら大学院で学ぶということは、かんたんな道ではないことを直感していましたが、1期生という選択をする同期や、熱い先生方とのご縁ができることは、学びをともに楽しめる環境であり、大学院生活をやり切れることにも繋がるだろうと考えました。

学び始めて感じていること

すぐに感じたのは、「学び方」そのものに対する革新性です。いつもワクワクしながら学びに向き合えています。

本学での学びは、単に講義や課題提出管理が完全オンラインであることに留まりません。教授陣や事務局の方からのメッセージでは、節々に、AIや新しいテクノロジー活用を奨励するような価値観を感じています。「AIを使ってレポートを書くな」と言われることはなく、むしろ「AIとディスカッションした結果をレポートにまとめてください」といった課題が出ることもあります。

また、一部の講師や教授からは、AIを活用した学び方についてのガイドをいただくこともあります。情報技術の現場経験を重ねてきた私にとっても、斬新なアイデアだなと感じる瞬間がたびたびあります。

講義のアーカイブ動画を倍速で何度も視聴したり、その書き起こしをNotebook LMにかけてマインドマップで整理したり、さらに自分の理解を確認するためにAIと対話をしたりということは日常茶飯事です。

大学院での学びは、先行研究の論文をリサーチすること多いですが、論文の検索や翻訳、読み進めていくうえでの関連知識のインプットなどにも、AIや各種のオンラインツールを活用しています。ゼミ内の発表にVR空間を使ってみたこともありましたが、VR空間でアバターを介したコミュニケーションをするだけで、想像していた以上に心理的な距離の近さと学習体験の深みを感じることができ、これもまた私にとって新しい発見でした。



河崎ゼミでのcluster実証

このような学びのスタイルを実践し、さまざまなバックグラウンドをもった先生方や同期生とのディスカッションを重ねていく中で、次世代の学び方や教育のあり方を展望するのは、非常にエキサイティングな環境だと実感しています。

今取り組んでいること、今後の展望

私が取り組んでいく教育活動のテーマの一つとして「テクノロジーによる教育価値の向上」というものがあります。テクノロジーを、事務手間の削減や効率化に使うだけではなく、如何に教育的価値を増大させられる方向に応用できるか、ということに関心をもっています。

上述した、私の事業で展開している「内省・ふりかえりの習慣化を支援するAIコーチングアプリ」は、この教育活動の一部でもあります。学習者が、より大きな学びの価値を享受するために、テクノロジーがどのように役立つのか。学習者にとっての価値と、事業価値を両立させるチャレンジに持続的に取り組んでいくために、現在は「如何に魅力的な学習体験を作り出すか」というところにフォーカスして研究活動を進めています。

その先は、本学での学び修了後の活動となると思いますが、中長期的には、私自身の教育領域でのスタートアップ事業を持続可能なものとし、そのための社会的・政策的な機能を包含するエコシステムを構想・提言・展開していくことが私のビジョンとなっています。



地域の大学での講演活動

終わりに

この記事を読んでくださっている方は、教育テック大学院大学での学びに関心を持たれている教育関係者やテック業界の方、経営者の方なのではないかなと思います。

率直にいうと、本学は、新しい環境故に、オンラインキャンパスツールの使い勝手や、学生生活における重要情報の連絡スタイルにて、課題感を感じることもあります。ですが、本学には、そういった立ち上げ期の課題を補って余りあるほどの有意義な環境があります。

オンライン大学院ではありますが、一度、同期生が対面で集まるチームビルディング合宿というものが、そのときに先生が仰った「皆さんは1期生として、時空を超えたリーダーシップを発揮してください」というメッセージが、私の心に強く刻まれています。

私はテクノロジー領域での経験を長く積んできた人間ではありますが、日本の教育には世界に誇れる考え方やコンテンツが沢山あると思っていますし、社会が投資すべき対象として、教育の領域は非常に重要なものだと考えています。

もし、この記事を読んで、本学での学びに対して関心が強まったという方がいらっしゃったら、その直感は正しいです。ぜひ、一步を踏み出していただき、ともに次世代の教育を創り出す、時空を超えたリーダーシップを開発してまいりましょう。

ご一緒できることを楽しみにしています！

PROFILE

株式会社ビルディット 代表取締役CEO。

通信事業者のエンジニアとしてキャリアをスタート。モバイル向けソフトウェア開発会社でのSEとして経験を積んだ後、ソフトウェア開発会社を創業。スマホ向けのゲームサーバー開発に従事し、複数のゲームタイトル開発を手掛ける。

その後、教育ベンチャーのCTO(最高技術責任者)として教育事業に関わったことをきっかけに、教育領域に特化してITを活用するフィールドで活動。現在の会社は創業3社目で、内省・振り返りを習慣化するAIコーチングアプリ「Stockr」を開発・展開。その他、教育事業者のDX支援も行っている。

研究テーマ

テクノロジーによる教育価値の向上と、持続可能なエコシステムの構築(仮)

所属ゼミ

河崎 雷太 教授 ゼミ



「自分が求めていた学びの場がここにありました！～居場所だらけの学校づくりを目指して～」

EMBA TECH 教育テック公式note
2025年9月5日 06:00

【教育イノベーター Voice 1期生リレー連載 No.8】

北海道の町教育委員会で、全国に前例のない新たな公立学校設立の形に挑む、

2025年入学1期生・室田 ひろみさん。

その原動力は、教育テック大学院大学で得られる“学びの化学反応”でした。子どもたちの未来のために、地方の教育を変えたい――。

距離・制度・環境という「壁」を越えて、

本気で学びたいと願い続けた10年。

ようやく出会えたのが、「フルオンライン」「教育DX」「教育経営」――

自分の想いにぴたりと重なった**学修環境との出逢い**でした。

本記事では、その学びの軌跡をたどります。

▼ 目次

なぜ、今この大学院で学ぶのか

新しい教育の形

今後の展望と皆様へのメッセージ

みなさんこんにちは。

教育テック大学院に第1期生として、北海道から学びに参加している

室田 ひろみ と申します。

実はここ10年程、自分のキャリアと業務に合わせて「大学院で学びたい!」「もっと専門的に学びを深めたい!」という思いと「学び欲」がずっとふつふつと心の中にありました。

なぜ、今この大学院で学ぶのか

北海道という土地柄、通信制の大学院なども調べ、相談会や面接等も受けていましたが、共通して必ず立ちはだかる壁にぶつかっていました。

それは「距離の壁」「総合的な学びが難しい壁」でした。

通信制大学院の相談会では、

「スクーリングがありますからね...一番遠くて、青森の方ですね。津軽海峡を越えるとちょっと大学院の学びは難しいですよ。休職して入学されるなら...」や、「1つの研究テーマにしぼって、その研究テーマに合う1人の先生にしぼって入試希望をしてください」とのお話をいただき、あきらめかけていた時に、教育テック大学院が開校することを知りました。

「フルオンライン」「教育DXと経営」「教育界の変革を推進する」...自分が求めているキーワードがちりばめられていて、「ここなら自分の求めている学びの場がある!!!」と確信して、入学させていただきました。

新しい教育の形

現在私は、学校現場での教員生活を経て、町の教育委員会で「新しい学校づくり推進室 指導主事」として、文科学委託事業「先導的学びの環境整備事業」を基盤とし、全町民がWell-beingに過ごせる学びの拠点となる複合施設と、そこに開校する幼小中一貫義務教育学校の設立を目指し準備を進めています。全国にも前例のないこのプロジェクトを進める中で、教育のDX（デジタル・トランスフォーメーション）と、学校経営の枠にとどまらない経営・運営マネジメントの必要性を痛感していました。

学校教育の枠組み自体も大きな転換期を迎えている中で、学校現場でも子ども達の未来のために何とかしていきたく思っているものの、コロナ禍を経て、社会の大きな変化とデジタル化、不登校の増加、教職員不足に加えて、地方小規模自治体においては人口が減少し、統廃合が進む中で学校も減少、都市部との環境格差も拡大...等、どこから手を付けていいかわからないほど課題は山積みで、子ども達も夢と未来を描きにくい雰囲気になっているのが現状です。本来であれば、子どもたちには学びを進めていくにしたがって夢や可能性を広げていってほしいと思いながら、消去法で進路を選択するような、また、選択肢さえない現実に直面しているのが地方の子ども達の現状です。

「小さな町の大きな夢のつまった学校」を何としてでも具現化させていくために、最先端の知見と学び、実務経験に基づいた研究を進められるフィールドが自分にとって必須でした。それが教育テック大学院で、今1つ1つ叶えられ形作られています。

そして、さらに、あたたかく研究に伴走してくださる先生方や職員のみなさん、多様な背景を持つ

学生同士の出会いと授業でのコミュニケーションからは、「学びの化学反応」と感じるほどの刺激とエネルギーをいただいています。入学しなければ、出会うことのなかった「人とのつながり」「学びとのつながり」ばかりです。毎時間の授業が楽しみです！



今後の展望と皆様へのメッセージ

仕事と学業の両立は決して楽ではありません。でも、それ以上の大きな「学びがい」があります。第1期生として入学して本当に良かったと思いながら、仲間と励まし合いながら取り組んでいます！

Profile

- ・北海道公立小学校教諭（大規模校、小規模複式校、小中併置校など様々な校種を経験）
- ・公認心理師、臨床発達心理士として、教育相談、カウンセリング、特別支援コーディネーター、通級指導なども担当し、授業のユニバーサルデザイン化にも取り組む。
- ・現在、北海道中頓別教育委員会 指導主事として勤務。中頓別町教育支援センター、なかとんフリースクールも運営しながら、新しい学校づくりに取り組む。北海道教育委員会スクールカウンセラーとして、宗谷管内の学校も巡回。

研究テーマ：

「（仮）地域複合施設一体型の幼小中一貫義務教育学校の学校運営とカリキュラムマネジメント ～人生100年の学びの拠点「中頓別学園」の教育実現に向けて～」

所属ゼミ

藤本 典裕 教授 ゼミ



子どもも大人もワクワクして目が輝く学びを — 5人の子育てと教室運営、そして大学院への新しい挑戦 —

MBA TECH 教育テック公式note
2025年9月5日 18:00

【教育イノベーター Voice 1期生リレー連載 No.9】

5人の子育てをしながら地域で英会話教室を立ち上げ、英語ミュージカル100演目超を実践してきた、**2025年入学1期生 高嶋 早由紀 さん。**

長年の現場経験と母親としての体験から、「幸福力を育む教育」の必要性を強く感じ、本学での学びをスタートしました。

AIや教育DXの最前線に触れながら、子育て・教育・社会課題をつなぐ視点で探究を深め、現在は「幸福力向上をめざす教育的アプローチ」を研究テーマに掲げています。

英語ミュージカルやディベート、親子コーチングなどの実践と往復させながら、家庭・地域・学校をつなぐ“新しい学びのモデル”の構築に挑戦中です。

本記事では、日常の中に学びと感動を育ててきた高嶋さんの探究と、その先に見据える未来の教育像をご紹介します。

▼ 目次

なぜ、今この大学院で学ぶのか

なぜ、今この大学院で学ぶのか

第1子の子育てを始めた25年前と比べ、女性の働き方や生き方、社会の子育ての捉え方、教育に求められるもの——すべてが大きく変わりました。この間、5人のわが子と、18年前に始めた地域の英会話教室での実践を通して、多くのことを学びました。

教室では「学校教育に今、足りないもの」という視点を取り入れ、幼児から高校生まで長く通える環境を生かして、“生きる力育成”を意識した取り組みを続けてきました。その一つである「生きる力を育む英語ミュージカル」は、16年間で約100演目をホールで公演。感動と笑顔にあふれる時間を共に創りあげてきました。年齢や性格を問わず、出演者一人ひとりが輝く姿を見るたびに、「日本の子どもたちが表現を苦手とするのは教育環境が原因ではないか」という仮説を持つようになりました。

一方、IT化・DX化が進むなかで、日本人の対人コミュニケーション力や幸福度、自己肯定感の低さが目立ち、「大人も子どもも疲れている」社会を実感しています。教育におけるITの最適活用と、幸せになるコミュニケーションの両立——この課題に正面から向き合い、理論と実践の両面から研究するため、本学の門を叩きました。フルオンラインの修士課程や助成制度は、家庭と仕事の両立を可能にし、私の挑戦を後押ししてくれています。



院生になってからの生活スタイル

家事・育児・仕事と並行しての大学院生活。25年間で培った「高速家事」を活かして朝の90分で5人分のお弁当、一通りの家事、夕飯の仕込み、家族の送り出しを済ませて机に向かっていきます。

受講と課題も、可能な限り効率化しています。フルオンライン社会人大学院の特質として、講義は動画でも受講可能。平日夜の講義は英会話教室のレッスン時間と重なるため、都合のよい時間に録画を視聴し、できるだけ早く課題に着手します。私の方法は、先に課題内容を確認し、生成AIに資料と講義内容を読み込ませ「課題のたたき台」を作成。その上で、自分が感じた疑問や掘り下げたい部分を整理し、講義を2倍速で聴いて狙いを定めた重要箇所を繰り返し確認しながら課題に追加修正を加え完成させます。

土曜日の講義はリアルタイムで参加できるため、できる限り顔出しで出席し、ディスカッションにも積極的に参加しました。発言することで理解が深まり、大学院生として学ぶ醍醐味を味わえます。

業務の傍らで課題が溜まってピンチになりかけたこともありましたが、仲間と励まし合ったり、お手上げの科目は理系の夫に頼って課題を仕上げたり、約4か月で50以上もの課題を提出したのかと思うと青春してるなあ！と感じます。

学び始めて感じていること

ありがたいのは、国内外から集まった多様なバックグラウンドを持つ仲間たちとの交流です。教育現場、企業、行政など、それぞれの経験から生まれる視点は刺激的で、自分の実践を客観的に見直すきっかけになっています。ITや教育データ分析、Well-beingや非認知能力育成の最新知見など、独学ではなかなかたどり着けない領域にも触れられています。

特に「教育の最適化」において、テクノロジーは単なる効率化の道具ではなく、子どもの主体性や幸福感を高める“環境づくり”の鍵になるという確信が強まりました。同時に、それを現場で活かす難しさも痛感しています。

今取り組んでいる研究・活動や面白さ

研究テーマは「幸福力向上をめざす教育的アプローチ」です。物質的な満足や長寿を追い求める時代から、自分らしい幸せを自ら築く時代へと移り、求められる力も変化してきました。「幸福力」という目に見えにくい力を科学的に分析し、体系化することで、ワクワクと感動をもって学びに向かう大人や子どもを増やしたいと考えています。幸福度の向上は、学力や経済力、社会性だけでなく、国全体の活力にもつながる——これが私の仮説です。

幸福力の要素を明確にして体系化できれば、日常の教育活動はもちろん、家事や育児にも応用できます。日々の時間の使い方に「幸福力育成」という視点があるかどうかで、大人も子どもも笑顔の輪が広がる。そのプロセスを再現可能な形にすることが私の挑戦です。



今後の展望と伝えたいこと

今後は、幸福力育成の要素を明確化し、英語ミュージカルや英語ディベート、おやこコーチングなど、さまざまな形で「幸福力向上をめざす教育的アプローチ」を実践していきます。家庭・学校・地域・企業など、あらゆる教育の場で幸福度と学びの質を両立させるモデルを構築し、親や教師、地域リーダーが活用できる形で広めたいと考えています。

家庭や地域からでも、未来を変える教育の種はまける。大きな仕組みや制度だけでなく、小さな実践の積み重ねが、やがて社会全体を動かす力になります。教育と幸福をつなぐこの探究を、卒業までに形にし、社会に還元していきたいです。

PROFILE

育児と仕事を両立しながら、英会話教室「Terakoya有隣学舎」を立ち上げ、19年間にわたり地域の親子と学びを共にしてきた。「英語を通して生きる力を育む」を理念に、英語ミュージカルを通じた表現教育にも注力し、100演目以上を上演している。

海外経験がほとんどない中で英検1級・TOEIC945点を取得し、英語コーチとしても活動。オンライン英語ディベートは300回を超える。また、子育て支援やキャリア形成に関するコーチング講座も開講し、多様な立場の人々の学びと成長を後押ししている。

研究テーマ

幸福度の向上を通じた国力強化の教育的アプローチ（仮）
ー英語ミュージカルを中心とする実践的提案

所属ゼミ

大和田 順子 教授 ゼミ



「1 EdTech技術標準」を推進したシステムづくり、データ利活用からの大学経営改善

MBA TECH 教育テック公式note
2025年9月6日 18:00

【教育イノベーター Voice1期生リレー連載 No.10】

「教育現場のテクノロジー活用の伴走者」として長年大学のICT導入と運用支援に携わってきた、**2025年入学1期生の小林 由昭さん。**

現場で成果を上げながらも、「教育の質」と「大学経営」の両立という難題に直面し、実務だけでは答えきれない限界を感じたことが大学院進学のかっかけでした。

本記事では、**1 EdTech技術標準**を軸に、教育デジタルエコシステムの社会実装を探究する研究や、大学院での学びがどのように実務を深化させているのかを紹介します。

▼ 目次

なぜ、今この大学院で学ぶのか

学び始めて感じていること

取り組んでいる研究・活動やその面白さ

今後の展望、読者に伝えたいこと

入学後の生活スタイルの変化

なぜ、今この大学院で学ぶのか

私は現在、株式会社内田洋行で執行役員 高等教育事業部長を務めています。大学におけるICTの導入支援や運用支援の販売・提供を通じて、教育や業務の質の向上を目指していくことが私の主な業務です。いわば、教育現場の「テクノロジー活用の伴走者」として、長年現場に寄り添ってきました。

ある大学では、最新のICTシステムを導入するプロジェクトを担当し、学生の学習成果が可視化され、教職員の業務効率も大きく改善されました。こうした現場での経験から、テクノロジーが教育に与えるポジティブな力を強く実感してきました。

しかし、近年の教育現場は人口減少、財政制約、デジタル格差といった複雑な課題に直面しています。今日の大学においては、単に「システムを導入する」だけでは、もはや不十分です。教育の質と大学経営の両方を見据えた“しくみ”をどうつくるか。その問いに、実務だけでは答えきれない限界を感じるようになりました。

そこで私は、実務経験を一步引いて見つめ直し、学術的な視点とともに、より広い視野で「教育×テクノロジー×経営」を考えるため、大学院に進学することを決意しました。

学び始めて感じていること

入学前は、「実務の延長線上で、理論を補強できればいい」と考えていたところが正直ありました。しかし、いざ講義が始まってみると、その想像はすぐに覆されました。

一番驚いたのは、自分が“当たり前”だと思っていたことを、問い直す視点が養われたことです。

たとえば、ICTを導入すれば業務は効率化される、学びは豊かになる。そう信じて疑わなかった私に対して、講義の中では、「なぜそれがうまくいかないのか」「そもそも“効果がある”とは誰の視点か」といった問いが次々に投げかけられます。

この「問い直し」のプロセスこそが、大学院で得られる最大の価値の一つだと感じています。

取り組んでいる研究・活動やその面白さ

私の研究テーマは、「**1 EdTech技術標準**を活用した教育デジタルエコシステムの社会実装」です。特に、日本の高等教育においてその普及をどのように進めていけばよいのかに関心を持っています。私の場合は実務と研究の方向性を合わせています。たとえば、LTI、OneRosterといった国際標準技術のシステムへの実装方法を確認したり、海外の大学の事例や同様の先行研究がないのか海外の論文検索をしたり、実務では得られなかった研究だからこそ新しい気づきがたくさんあります。

必修科目の「教育テック総論」「教育テック事例研究」では、理論と自分の知識の範囲を超えた実

実践を学べます。また、「教育データ・アナリティクス論」では、研究に必要となる因果推論を学ぶことができます。加えて、私は「教育マーケティング・広報ブランディング」や「教育テックのためのICT基礎」を選択履修していますが、講義内容を実務に照らし合わせて考えることで、とても有意義なものになっています。これらのすべてが、自分自身の 研究を深めることにおいても、実務においても土台になっているという実感があります。

それから、様々な面で先生に直接ご指導いただけることや、仕事の付き合いではない学友ができたことも社会人院生としての貴重な財産だと感じています。

今後の展望、読者に伝えたいこと

研究と実務を行き来しながら、私は「いい大学づくり」「いい教育づくり」を、ICTの力を通じて具体的に形にしていきたいと考えています。読者の方へお伝えしたいのは、「学び直しは決して遅くない」ということ。むしろ実務を経験してきた今だからこそ、問いが深くなり、学びによって世界が広がるという実感があります。

入学後の生活スタイルの変化

ー1日の過ごし方／1週間の過ごし方ー

働きながら学ぶ——これは想像以上にハードです。ですが、思考の“切り替えスイッチ”を持つことで、むしろ日々の生活が豊かになったように感じています。

【平日】

早朝：講義のオンデマンド視聴やレポート作成

日中：通常業務（提案活動、社内会議、外勤など）

夜：帰宅後に1～2時間、講義のオンデマンド視聴やレポート作成

【週末】

土曜午前：講義のオンデマンド視聴やレポート作成

土曜午後：課題の執筆、文献リサーチ

日曜：できれば“休養”したいですが、講義のオンデマンド視聴やレポート作成をすることも。

学習環境

ーオンライン受講、オンデマンド、課題の取り組み方ー

オンライン受講とオンデマンド配信を柔軟に使い分けています。普段は東京にいますが、出張先の大阪でオンデマンド受講をしたり、多忙な時期は講義にリアルタイム参加できないこともあります。録画によるオンデマンド視聴が可能なため、重要な部分を繰り返し確認でき、自分のペースで深く学び直すことができます。

課題に取り組む際は、メモアプリで思いついたことを記録しておいたり、生成AI（ChatGPTなど）

を使って論点整理などしています。また、論文検索では講義の中で教えて頂いたアプリやツールを積極的に活用して進めています。アプリについては、ゼミの学友から最新のツールを教えてもらったり、使い方を助けてもらっています。

“仕事”と“学び”が互いに補完しあう感覚は、社会人院生ならではの醍醐味です。

PROFILE

株式会社内田洋行 執行役員・高等教育事業部 事業部長。文系学部を卒業後、同社に入社。CADシステムの営業を皮切りに、高等教育分野のICTシステムに約30年間携わる。

「いい大学づくり、いい教育づくり」を信条に、現場の声に耳を傾けながら事業を推進してきた。現在は大学改革や教育DXの支援に取り組むほか、日本教育工学会（JSET）大会企画委員や某区の地域猫保護協力員など、社会貢献活動にも力を注いでいる。

所属ゼミ

山田 恒夫 教授 ゼミ